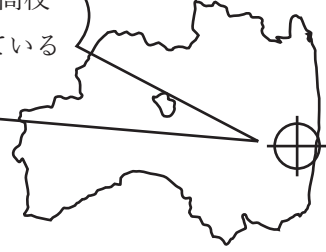


CAP（コミュニティ・エイズ・プロジェクト）

どんな団体？

コミュニティ・エイズ・プロジェクト（通称 CAP）は、東日本大震災が発生した 2011 年より、**福島県立双葉高校**の高校生に学習支援を行いながら、彼らに寄り添い、彼らを応援する活動を続けています。

福島第一原子力発電所に最も近い高校
2016 年度をもって休校が決定している



印象に残った活動

高校生と大学生が、東日本大震災に対する想いを共有する時間を設けた時、ある高校生が、勇気を振り絞るようにこんな言葉を口にしました。

正直に言っているですか？

学校面白くないっす



どうして印象に残ったの？

誰も一度は言ったことがあるような「学校がつまらない」という言葉。その言葉を「正直言っているですか？」と、普段はなかなか口に出来ない言葉のように語りました。「どうしてそんなに言いづらそうなの？」という疑問が、心にひっかかりました。

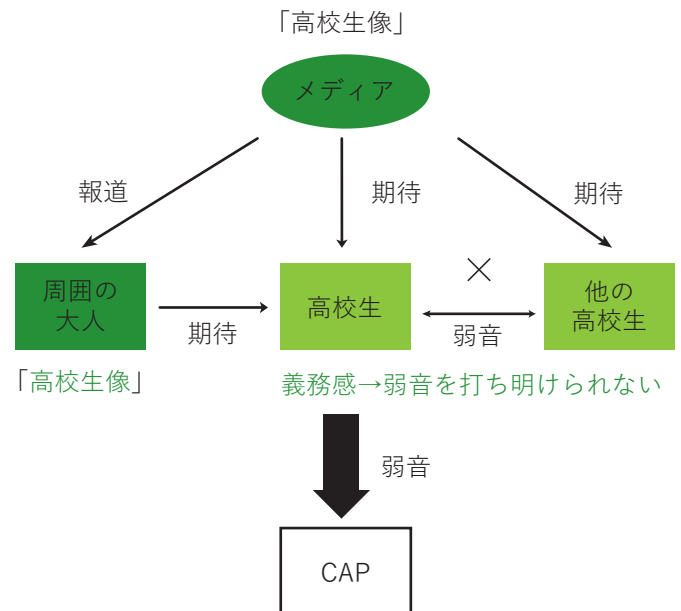
見えてきた、「社会の課題」

私たちは、活動を通して感じた「ひっかかり」について、なぜ心にひっかかったのか、議論を重ねました。その議論から、『**メディアによる「高校生像」の報道が、弱音を打ち明けられない高校生を生む**』という「社会の課題」が見えてきました。

「被災したけれども、立派に高校生活を終える高校生」

という「**高校生像**」は、世間一般的に感動されます。メディアは、世間受けの良い「**高校生像**」を求めてしまうあまり、高校生に”最後の双高生”として立派な姿であるように、期待をしてしまっているのではないかと考えました。

また、メディアが「**高校生像**」の報道を行うことで、親や先生など周囲の大人に、その「**高校生像**」が刷り込まれます。それにより、周囲の大人は、「”最後の双高生”として立派に高校生活を終えてほしい」という願望を持つようになります。そして、その願望を叶えるため、高校生に対して過度に期待してしまっているのではないかと考えます。



一方、高校生は、その「**高校生像**」の期待に応えなければならない義務感を感じます。その結果、「学校がつまらない」と弱音を言う事は、「**高校生像**」の期待に当てはまらなと感じ、弱音を打ち明けられない状況が生まれている、と考えます。

CAP の今後

高校生に対して過度に期待をせず、親でも先生でも友達でもない”第三者”として関わる大学生に、高校生は弱音を打ち明けてくれました。私たちはこれからも、高校生に理想や期待を押し付けず、彼らのありのままを受け止める姿勢で、「**弱音を打ち明けられる相手**」として、彼らを応援したいです。